

福島原発事故と放射線の影響をデータで学ぶ

図説 放射線学入門 基礎から学ぶ緊急被曝ガイド

著者：岡崎龍史
●A5判・128頁（2012年1月刊）
定価（本体1,800円+税）
ISBN978-4-86003-422-1



放射線を正しく理解するのは、難しい。物理学にはじまり、化学や生物学などの用語や単位が用いられるからだ。放射線学はそうした長年の研究や疫学から、産業、医療での効能、危険の目安までも含めて、数多くのデータが積み重ねられてきた科学である。本書は緊急被曝ガイドとして、一般市民向けに放射線の基礎と原発事故での放射線の影響をわかりやすく図説する。

子供たちに、本当にキケンなのはなんだろう？

放射線心身症？ 福島原発放射線より 日常にあるはるかに恐ろしいもの

著者：加藤直哉
●新書・208頁（2011年10月刊）
定価（本体1,200円+税）
ISBN978-4-86003-505-1



東日本大震災での原発事故は低線量事象であり、被曝で生命に危険が及ぶことはない。むしろ、行政と報道の混乱等での心理的ストレスが「放射線心身症」ともいべき健康障害を生む。それよりも、現代の食生活にこそはるかに恐ろしいものがある。無用な不安よりも、必要な知識で立ち向かう救済のメッセージ。

誤った政府介入 住民と家畜の被害甚大 福島の核放射線は健康被害なし

福島 嘘と真実 東日本放射線衛生調査からの報告

著者：高田 純
●A5判・104頁（2011年7月刊）
定価（本体1,200円+税）
ISBN978-4-86003-417-7



世界の核災害地と比べて、福島の放射線衛生上の実被害は極めて低い。より厳しい核被災地や核汚染地が復興したり、人びとが再定住している現実からしても、また、放射線防護学の見地からも、福島県はもちろん、福島20キロメートル圏内も必ず人びとが暮らせるようになる。その日は遠くない。

福島第一原子力発電所 の事故にともない関心の高い

放射線，被ばく についての書籍をご紹介します。

放射線影響研究の歩みと LNT 仮説の解き方から見えるもの

放射線は本当に微量でも危険なのか？ 直線しきい値なし（LNT）仮説について考える

著者：佐渡敏彦
●B5判・256頁（2012年3月刊）
定価（本体3,300円+税）
ISBN978-4-86003-423-8

微量の放射線に対してあまりにも過敏に反応しすぎる国内および国際的な風評被害を克服するためにも、放射線の健康への影響を正しく理解し、放射線を正しく恐れ、過剰に恐れにすぎない知識を国民の一人ひとりが身につけることが非常に大切になっている。この問題は、これからの全人類にとっての共通の課題でもありつづけるであろう。放射線による発がんリスクのパラダイムとしての LNT モデルの考究は、人類が微量放射線の幻影への恐怖から解放されるための根元のテーマである。



医療・防災関係者必読のドキュメント

放射線災害と医療 福島原発事故では何ができて 何ができなかったのか

編著：放射線事故医療研究会
●A4判・108頁（2012年3月刊）
定価（本体2,000円+税）
ISBN978-4-86003-421-4

3月11日の福島原発事故を受け、放射線事故医療研究会では8月27日に「緊急被ばく医療体制の再構築」をテーマに定例研究会を開催。各関係者の経時的な事故対応やモニタリング発表ののち、事故に対して何ができて何ができなかったのか、また何をしなければならなかったのかなど、白熱したディスカッションが行われた。医療、防災関係者が問題点の共有と再構築に向けた課題を浮き彫りにしていくための必読のドキュメント。



知らないことや誤解が多すぎませんか？

お母さんのための放射線防護知識

チェルノブイリ事故 20年間の調査でわかったこと

著者：高田 純
●A5判・64頁
定価（本体 800 円＋税）
ISBN978-4-86003-367-5

原子力発電所立地県の住民には万一の放射線災害の不安や心配が残る。ことに子どもへの影響を心配する母親を対象に、放射線災害やそれに対する自衛策をわかりやすく解説し、世界各地の調査を踏まえた科学としての放射線防護の実際を示す。福島原発事故直後から「大変わかりやすい」と高い支持を得たベストセラー。



先生、放射線を浴びても大丈夫？と聞かれたら

虎の巻 低線量放射線と健康影響

編著：独立行政法人 放射線医学総合研究所
●A5判・228頁
定価（本体 2,500 円＋税）
ISBN978-4-86003-377-4

・私たちは日常生活でどれくらいの放射線を浴びているのか？
・ごくわずかな量の放射線は本当に安全なのか？
これらの疑問に答え、放射線を安全に利用するために定められている規制の仕組みを解説。放射線を改めて学び、指導していく防災・医療・教育関係者必携。



低線量被曝による発がんリスクの科学的根拠とはなにか？

放射線および環境化学物質による発がん 本当に微量でも危険なのか？

編著：佐渡敏彦／福島昭治／甲斐倫明
●B5判・270頁
定価（本体 3,800 円＋税）
ISBN978-4-86003-337-8

原子力施設から放出される放射性物質や環境化学物質によって増えるかもしれないがん発生「リスク」について、いまだ未解決な問題をどのように考えたらよいのか？ これらの発がん作用とリスクに関して「わかっていること」と「わかっていないこと」を明確にしなが、研究の現状と将来への課題を解説。



原爆後障害とチェルノブイリ原発事故で世界が教えられたこと

日本の疫学

放射線の健康影響研究の歴史と教訓

著者：重松逸造
●新書・196頁
定価（本体 1,200 円＋税）
ISBN978-4-86003-503-7

〈病気の予防と健康に必要な情報を提供する学問〉として広く利用される疫学研究の指導的役割を担い、被爆者追跡調査により、日本の疫学水準を国際レベルにまで高めた著者の研究の歩みを総括。原爆後障害研究とチェルノブイリ原発事故に果たした疫学の役割について、福島原発事故を知る上で欠かせない基礎知識。



放射線と放射線防護の歴史からみえるもの

放射線物語

！と？の狭間で

著者：衣笠達也
●新書・162頁
定価（本体 1,200 円＋税）
ISBN978-4-900770-88-1

緊急被ばく医療の重要性を訴え、実践してきた著者は、放射線の発見から原子力エネルギーの利用、放射線防護の歴史を平易に解説。東海村臨界事故などの遠因が、原子力開発の工学的技術導入の偏りにあり、医療・保健部門の整備が重要な課題であることを指摘する。



「リスク音痴」から「リスク活用」への視点

日本人はなぜ原子力に不安を抱くのか 日本人の心とリスク

著者：青山 喬
●新書・180頁
定価（本体 1,200 円＋税）
ISBN978-4-86003-504-4

放射線による影響の評価は「リスク」という概念の上で成立している。そうした先端科学技術社会に欠かせない「リスク」を理解し、活用していくために、日本人は「リスク」とどのように向き合っていくべきか？ 「リスク」の概念とその関わり方について、多角的な視点から考察。

